

論文の内容の要旨

論文題目 スンバワ語の文法

氏名 塩原朝子

本研究では、インドネシアの言語の一つ、スンバワ語の包括的な記述を行う。

第1章ではスンバワ語に関する社会言語学的状況、先行研究、および本研究の基盤である筆者自身の調査について述べる。

第2章、第3章は以降の章の導入である。第2章では音韻の概略を、第3章では文法の概略を示す。

第4章では形態論を扱う。まず、1節でスンバワ語における形態素の分類（語根、接辞の定義）を行う。次に2節で語形成について述べる。ここでは、この言語の語形成には接頭辞による派生、「特に強い強勢」の付加による派生、重複、複合があることを示す。

第5章では文の構造を扱う。1節では文の成分（述部、補語、副詞成分）と構成要素（名詞句、副詞句、前置詞句、動詞句）を規定する。

2節から4節では1節で規定した文の構成要素のうち、名詞句、副詞句、前置詞句についてそれぞれ述べる。

5節から7節では単文の構造について述べる。5節では述部の主要部が動詞以外である文について、6節では述部の主要部が動詞である文について、その主要な成分である述部と補語の現れ方を中心に述べ、7節では単文一般における副詞成分の現れ方について述べる。

8節では名詞節の構造を、9節では動詞連続を扱う。また、10節では否定詞、限定詞、叙法辞の現れ方について触れる。

第6章では述部の構成要素であるアスペクト・モダル辞および否定詞の機能を扱う。

1節ではアスペクト辞、モダル辞について述べる：1.1ではアスペクト辞 *ka* 「完了」の機能を、1.2ではモダル辞 *ya* 「先行する状況との結びつき」の機能を、1.3ではモダル辞 *ma* 「願望」の機能を、1.4ではモダル辞 *na* 「ある状況が成立しないことへの願望」の機能を扱う。

2 節では否定詞 *nó* と *siong'* について述べる。2.1 では *nó* の機能を扱い、2.2 では *siong'* の機能を扱う。

第 7 章では、文の成分の一部あるいは文全体の一部として現れ、アスペクトやモデルに関する内容を表す要素、叙法辞の機能を扱う。1 節では四つの叙法辞 *ké'* 「不確定」、*mo* 「起動、妥当」、*po* 「必要な条件」、*si* 「対比」を提示し、その機能の概略を述べる。2 節では *ké'* 「不確定」の機能を、3 節では *mo* 「起動、妥当」の機能を、4 節では *po* 「必要な条件」の機能を扱う。5 節では、*ké'* 「不確定」、*mo* 「起動、妥当」、*po* 「必要な条件」が、文中の位置によっては談話の焦点をあらわすことを示す。6 節では叙法辞 *si* 「対比」の機能を扱う。

第 8 章では複文の構造を扱う。1 節では複文の分類を行う。2 節では、名詞節を含む複文を扱う。3 節では、文が名詞節を形成せずに名詞句内の修飾成分として機能する場合を扱う。4 節と 5 節では、従属文のうち、接続詞を伴わないものを扱う：4 節では通常の単文と同様の形で現れる従属文について述べ、5 節では、主文の成分の一つと従属文の主語または目的語（に相当する要素）が同一指示であり、その「共通の要素」が従属文中には現れない場合について述べる。6 節では従属文のうち接続詞が文頭に現れるものを扱う。

第 9 章では指示詞 (*ta* 「近称」、*nan* 「中称、定」、*tó'* 「現場指示」、*ana* 「遠称」、*mé'* 「不特定」の 5 つ) について述べる。1 節で指示詞の機能の概略を提示し、2 節で先行研究および近隣の言語の状況について触れる。3 節では指示詞の形態論的、統語的機能を扱い、指示詞が語形成や統語的機能の面で他のどの語類とも異なる一つの文法カテゴリーを形成していることを示す。4 節では指示詞の用法を扱う：4.1 では場面指示における用法を、4.2 ではときを表す用法を、4.3 では文脈指示的用法を扱う。また、4.4 では *ta* 「近称」の物語における用法について述べる。4.1 から 4.4 までの内容を受け、4.5 では個々の指示詞の基本的な機能について論じる。

第 10 章では論文全体の総括を行う。